

## 新聞小説としての菊池寛「貞操問答」

関

肇

大正八年三月に大阪毎日新聞の特別契約社員として入社し、翌年の「真珠夫人」(大9・6・9〜12・22)で新聞小説家としてのスタートを切った菊池寛は、同十三年八月に退社した後、約十年のブランクを挟んで、昭和九年三月、大阪毎日新聞・東京日日新聞に再入社する。「貞操問答」は、その再入社後の第一作目の新聞小説であり、昭和九年七月二十二日から翌十年二月四日にかけて、百九十六回にわたって『大阪毎日新聞』および『東京日日新聞』に連載された。挿絵は、新人の小林秀恒が担当している。三上於菟吉の「街の暴風」(昭9・1・1〜7・21)の後を受けたもので、同じ時期の夕刊には、白井喬二の「帰去来峠」(昭9・4・21〜10・2・10)が載っていた。本稿では、この菊池寛の再入社第一作「貞操問答」の新聞小説としての特質について考察していきたい。(以下、適宜、新聞名を大毎・東日と略称し、両紙に併載された記事および「貞操問答」の引用は『東京日日新聞』に拠り、年月日のみを略記する。)

### 屈折する構想

大毎・東日の両紙には、「貞操問答」の連載開始の一週間前に予告が掲げられ、次のような菊池寛の「作者の言葉」が付されている。

時代がどんなに変つて行つても、また變つて行くにつれ、女子の貞操は人生問題の中でもつとも大きい問題の一つである。貞操の価値は、どのやうに変遷して行くか、また現代の女性の貞操観はどんなに変つて行くか、いろ／＼考へてよい問題が多いと思ふ。私はこの小説において、数人の女性を中心に、貞操問題を、いろ／＼描きながら考へて行きたいと思ふ。

最初の「真珠夫人」以来、菊池寛はこれまでも女性の貞操をめぐる小説をいくつも書いているが、ここにはたんなる趣向や風俗としてではなく、「人生問題の中でもつとも大きい問題の一つ」として、時代とともに変化していく「貞操の価値」を問い、「現代の女性の貞操観」を正面から描いていこうとする意欲的な姿勢がうかがえる。そのことは、物語の冒頭部にも明瞭に示されている。

「金きんを売る」と題して七回分があてられた最初の章では、第一回の書き出しから、ヒロインの南條新子が登場する。新子が家の二階の居間からぼんやり小雨の降る屋外を眺めていると、路地に魚屋や豆腐屋がやって来る。そのありふれた庶民生活の日常的な光景を見ながら、新子はあるい欠伸をする。この雨の日の場面が、窮乏した家庭生活に閉じ込められている新子の孤立した状況を示唆するものであることは明らかだろう。そこに妹の美和子が潑刺としたさまで現れ、新子にストッキング代をねだつて遊びに行つてしまうと、今度は隣の部屋から姉の呼ぶ声がする。そして第三回にかけて、学問好きで姉の圭子の家計に無頓着で贅沢な生活ぶりや、製糖会社の技師だった父が亡くなった後の南條家が凋落した経緯、新子が一身に生活の苦勞を引き受けて一家を支えようとしているさまが呈示される。

この初めからわずか連載三回分の三人姉妹のやり取りを通して、彼女たちの性格の違いが鮮やかに描き分けられている。その中心となる次女の新子は、「広い聡明な額」に「のどかさうな、それでゐてひどく謎めいてゐる大きな目」

(一)をした女性であり、「聖母のやうな清かさ、娼婦のやうなエロがある」(二)の対して、三女の美和子は、「あまり成育しない前に、熟れてしまった果物のやうに、小柄な、身体全体が、ピチ／＼した」(一)モダンガールである。また、演劇に熱中している長女の圭子は、「姉妹の中で一番美しい」「完璧な美人タイプ」だが、「お白粉気がなく」「清楚な感じ」(二)とされる。この个性的な三人姉妹が、それぞれの貞操観にしたがつて動いていく姿を浮き彫りにすることによって、時代の変化にさらされた女性の貞操問題のあり方を捉えようとする道筋が用意されているのである。

さらに第四回からは、舞台を階下に移して、新子と没常識な母親とのやり取りが展開される。母親が生活費のたしにエンゲージ・リングを売り払うエピソードには、金輸出再禁止にいたる昭和恐慌の経済的混乱や就職難といった、当時の社会の動向が絡められている。<sup>1)</sup> そうした厳しい経済不況にさらされた、寄る辺ない中流家庭として南條家が設定されているのは、より時代に密着したかたちで「貞操の価値」を問題にするためであつたと考えられる。

冒頭の「金を売る」の章は、「前途に横はる生活の不安」(三)にかられた新子が、「非生活的な一家の代りに、自分が働くより仕様がなない」(五)と決心し、恋人の美沢直巳との結婚を先延ばしにして、前川家の家庭教師になろうとするまでで結ばれる。その末尾では、前川家の主人が品行方正な好人物であるのに対して、その妻が相当扱いにくい人物であることがほのめかされている。一種の職業婦人としての新子の前途に待ち受けている波瀾の要因を指し示すことによつて、読者の関心をその先の物語へとつないでいくのである。

新聞小説の成否は、その書き出しに多くを負っている。冒頭部には、読者を物語世界へと導き入れる簡潔で確かな造形力と、先へ先へと読みを推進させていくための牽引力が作者に求められるだろう。連載開始からちょうど一週間のうち、新子を中心とする南條家の三人姉妹の性格を描き分け、困窮する一家の生活事情を示し、新子の婚約者の美沢の存在や家庭教師となる前川家の主人とその妻などの主要な人間関係までを呈示したうえで、波瀾含みの新子の

前途に対する読者の関心を喚起するといった、速いテンポで展開していく「貞操問答」の書き出しには、新聞小説にふさわしい練り上げられた作者の表現力が十分に発揮されているといえる。

しかし、順調な滑り出しを見せながらも、この小説は必ずしも当初の作者の意図どおりには進展していかなかった。結末部近くには、タイトルと同じく「貞操問答」と題された章があり、前川準之助の資金援助によってバー・スワンを開業した新子のもとに、前川の妻綾子が乗り込んできて新子を面詰する、物語のクライマックスが形作られている。しかし、ここでは新子が前川に貞操を売って妾になっていると思いつく綾子夫人に対して、美和子が姉の純潔を主張して撃退するにすぎず、貞操問答そのものは未だに終わっている。片山宏行の指摘のとおり、「新子はただひたすらに耐えるのみの存在として男性優位の社会の前に、可憐な一輪の花のごとくたたずむばかり」<sup>2)</sup>であって、本来の主題は追究されないままなのである。

新聞連載が完結した直後に出版された単行本『貞操問答』（昭10・2、改造社）の「跋」には、その事情がこう明かされている。

長篇小説を書く場合、性格は経で、筋は緯である。最初から、筋に適合するやうに、性格を書いて行くのであるが、しかし一日一日書いて行つてみると、性格も亦一個の生物となつて、作者の考以外に成長してしまふことがある。そんな場合、よく筋と矛盾を生ずるのである。筋通りにかけば、性格を傷けることになるし、性格に忠実ならんとすれば、予定の筋を運べなくなる。自分のこの小説なども、あまりに性格本位にしたため、最初の主題が充分書けなかつた小説である。

最初に予定していた筋が、新聞連載の途中から変更されたことが分かる。小説を書き進めるにしたがって、筋通りに書くか、登場人物の性格に忠実に書いていくかというジレンマに直面し、「性格本位」を選び取った結果、「予定の筋を運ばなくな」り、「最初の主題が充分書けなかつた」というが、ではその「予定の筋」と「最初の主題」とは、いったいどのように構想されていたのだろうか。また、当初の構想を変化させ、「性格本位」に書いていくという選択には、どのような要因が介在していたのだろうか。

このことに関して、菊池寛が詳しく言及しているのが、座談会「結婚・貞操・性・恋愛を語る夕」〔『経済往来』昭10・4〕である。彼は「貞操問答」に書こうとしたテーマと筋について、次のように述べている。

私の「貞操問答」は最初考へた事が書けなかつて出来損なつてしまつたんです。初めの考へちや生活のために貞操を売つてもいゝと云ふテーマで書く積りだつたんです。前川と新子と早くから関係しちやつて、前川から金を貰つて一家を支へて行くのを姉妹達が非難すると云ふ積りで書き始めたんですよ。それが余り上品に書き過ぎちやつたもんだから関係させられなくなちやつた。あんなことで終つちやつたから結局題に副はなかつたんですね。僕の積りでは貞操と云ふものは万一の場合に売つてもいゝと云ふことを書く積りで居たけれども、新聞小説のテーマとして少し大胆すぎてそのまゝ、書けば嫌がる読者も居たんぢやないかと思ふ。

ここで菊池寛は、「生活のために貞操を売つてもいゝと云ふテーマ」が当初の構想だったことを披瀝しているが、その貞操観が、女性にとって貞操に至高の価値があるとする当時の一般的な社会通念を大きく逸脱したものであることは間違いないだろう。生活問題のように「或る程度まで止むを得ない事情があれば、貞操を売ると云ふことは許さ

れるんぢやないかと思ふ」と発言する彼の立場は、いわば生活第一、貞操第二ということにある。さらに彼は、未婚女性の純潔について、「純潔のための純潔は意味がない。純潔なることは将来結婚する時に有利であると云ふ意味ならば、認めるけれども、結婚と云ふものと離して、絶対的の純潔を認めない」と述べ、「貞操なぞと云ふのは一種の便宜的のものぢやないですか」とも発言しているとおり、女性における貞操の価値を絶対視する既成の道徳的な観念を揺るがそうとしたのである。

このような主張は、これより二十年前に生田花世が「食べることと貞操と」（『反響』大3・9）において、「今の日本の家族制度及び社会制度」の中では「女は貞操よりも食べる事の欲求を先きとする」と主張して、雑誌『青鞥』の女性たちの間で展開された貞操論争を想起させるが、いわゆる〈貞操は女の命〉というような、貞操を絶対視する観念に女性が支配されている状況は、当時もほとんど変わっていなかったことに注意したい。

女性の貞操の価値を問い直そうとする菊池寛の立場は、当時の社会が男性の不貞には寛容であるのに対し、女性には一方的に厳格な貞操を強いる、性的なダブル・スタンダードへの批判にもとづいている。「貞操問題はやはり男性に対する法律と女性に対する法律と違つて居るから起る。道徳も違つて居る。だから混乱するんだと思ふ」、「道徳的には男女同権にすれば一応僕は解決がつくと思ふんです」と彼は述べるが、時代の変化とともに女性の自覚が次第に高まりつつあるにもかかわらず、当時の法律や道徳は旧来のままの貞操観念を女性に強いようとする。そのため女性の意識と社会通念との間に亀裂が生じているのであり、「貞操問題は、僕は将来段々女性が男性と同じ位に活躍すれば段々増えるのぢやないかと思ひます。（中略）それは男性の決めて居る貞操観念に女性が段々と抗議して来るんでせう」という見解を示している。また、妻が夫に嫌気がさして離婚するケースが増えていることにふれて、「女性の自覚ぢやないんですか、段々目覚めて来るから、さういふ今までの因習や社会的の何（注、重圧）で、束縛出来なくな

つたんぢやありませんか?」「今までの貞操観念の危機だけど、それはやはり新しい貞操観ぢやないですか? 今迄の、子供さへあればどんなことがあつても亭主にくつ附いて居なければならぬといふやうな、貞操観に対する抗議で、それで、やはり女が救はれるんぢやないですか?」とも述べている。

小説「貞操問答」の書き出しが、「金を売る」の章からはじまっているのは、おそらく新子が生活のために前川に「貞操を売る」という展開を導き出すためのものであつたのではないだろうか。予定されていた筋では、「前川と新子と早くから関係しちやつて、前川から金を貰つて一家を支へて行くのを姉妹達が非難すると云ふ積り」だつたとされたとおり、貞操問答そのものは、前川に心ならずも貞操を売り、経済的援助を受けて南條家を支えることになる新子が、その恩恵を受けながらも身勝手な姉の圭子や妹の美和子の非難にさらされるかたちで、三人姉妹の間に繰り広げられ、そして新子が深刻な煩悶に苦しむという展開をたどることになるはずだつたのである。<sup>3)</sup>

この「貞操問答」における当初の筋とテーマが十分に書けなかつた要因として、単行本『貞操問答』の「跋」では、筋よりも「性格本位」にしたことをあげていたが、確かにこの小説においては、登場人物の性格にそくした微妙な心理の変化が精細に表現されている。

たとえば、新子が前川の世話になつてバー・スワンを持つ決心をするまでには、恋人の美沢を妹の美和子に奪われ、演劇マニアの姉の圭子には生活のための金を使い込まれるという出来事がある。そのために「今よるべき一縷の糸もない新子のよりどころのない心の寂しさ」(百七)が、徐々に彼女を前川に近づけていく。「この相談に乗つて、此上ともこの人の世話になることは、自分で退引ならぬ羽目に自分を追ひ込んで行くやうな気がした」(百十)と躊躇しつつも、「自分が一家のためだと思つてしたことが、いたづらに姉の演劇熱をそゝり、妹のわがま、を增長させ……前川氏の家庭を騒がし、奥さまにイヤな目に会はされ……だから、今後も自分としてはあまり殊勝な心がけで、行動する

よりも、もつと大胆に……。奔放に、前川さんにおねがひして、いつそバーでも出して貰つた方が……」(百十五)という考えに傾いていくその経緯は、聡明で慎み深く苦勞性な新子の性格に見合った無理のない展開になっている。

一方、「温良で、物分りがよくつて、品行方正」(七)な紳士であり、「女性尊重主義者」(五十二)とも評される前川が、気位が高くわがままな綾子夫人とは対照的な新子に好意を寄せ、それが次第に愛情へと発展していく心理も丹念に描かれる。新子のパトロンとしての前川は、新子に美沢という恋人がいたことを知ったとき、「かうして、新子の面倒を見てゐて、いつかどうしようといふ野心は、神に誓つてない」と自己を抑制し、軽井沢における雷雨の中で「自然の力と境遇の偶然性に駆られて」新子と接吻したことが、綾子夫人による新子の追放という事態を引き起こしたことを顧みて、「清浄に、潔く、心持の上でも、その野心の芽も摘み取つてゐるのであるが、しかし自分があきらめてゐるだけに、新子の周囲も、掃き浄められたものであつて、ほしかつた。／自分が足を踏み入れない聖域には、他人にも足を踏み入れて貰ひたくなかつた」(百三十五)というように、その胸中が示されている。

このように新子や前川の性格にそくして精細に心理を描いていけばいくほど、当初の構想どおりの展開が困難になることは明らかだろう。なぜなら、早々と前川と新子に関係を結ばせようとすれば、彼らの性格は同一性を保持できなくなり、物語のリアリティを損ねることになってしまうからである。

さらに、「貞操問答」の構想の変更に関しては、小説そのものを形作る内的要因だけでなく、新聞小説の読者という外的要因が介在していたことにも留意しなければならない。先の座談会「結婚・貞操・性・恋愛を語る夕」において、「余り上品に書き過ぎちやつたもんだから関係させられなくなちやつた」とし、さらに「貞操と云ふものは万一の場合に売つてもいゝと云ふことを書く積りで居たけれども、新聞小説のテーマとして少し大胆すぎてそのまゝ書けば嫌がる読者も居たんぢやないかと思ふ」と述べられていたように、不特定の多様な読者を持つ新聞小説であるこ

とを考慮すれば、きわどい場面を回避し、社会通念を極端に逸脱しないことが求められる。同座談会の出席者の一人で、東日の客員である千葉亀雄は、「菊池君が、元の意図通りに書けなかつた。そこで問題にはなつたが、「貞操問答」はあの程度なら、それほど一般通念と、非常に違ひ過ぎたとは云へない」としたうえで、「却つて菊池君の言はれたやうな最初のテーマで書いたなら、もつと示唆を与へて問題にもなつたらうし、非難も起つたらうと思ふ」と述べているが、それは要所を押さえた発言といえる。

「貞操問答」の当初の構想を変更させることになつた小説そのものの内的要因と、いかに読者に受け入れられるものにするかという外的要因とは、三〇〇万部に迫る圧倒的多数の発行部数を誇る大毎・東日の紙面に掲げるにふさわしく、より質の高い新聞小説を提供しようとする理念にとともに根ざしたものと捉えられるだろう。それらの二つの要因が相互に絡まり合い一体となつて構想が屈折していくにしたがい、この小説の後半部は新子と前川の恋愛物語めいた様相を呈するようになるが、「殉愛の道」と題された最終章は、前川が「自分の家庭や位置や名誉までも、犠牲にする覚悟」(百九十五)を決めて、新子とともに歩み出すところまでしか描かれていない。あえてそれから先の展開を示さない、オープン・エンディングが採用されているのである。

この結末について、菊池寛は単行本『貞操問答』の「跋」でこう説いている。

「…」ある読者には、この結末はあまりに、アツケないと思はれるかも知れない。しかし、人生に何等の結末もないごとく、小説にも結末がない方が、自然なのである。人生が、事件から事件への無際限の連続であるが如く、小説にも亦、幸福なる結末などあり得ないのである。

主人公を殺す結末の如きは、小説としても尤も愚劣であるし、結婚に終る結末の如きも、甚だ心細いものであ

る。結婚は、物事の終りではなくして、むしろ多くの事件の始まりであるからだ。

小説は、ある無際限につゞく人生の一節だけを切り取つたもので、そこには本当の初と終とはないものであると思ふ。

ここで次々と否定されていく「幸福なる結末」や「主人公を殺す結末」「結婚に終わる結末」が、恋愛メロドラマにありがちな陳腐なパターンであることはいうまでもない。「貞操問答」においてオープン・エンディングが採用されたのは、そうした紋切り型のメロドラマに回収されることを拒絶しようとしたものではないだろうか。

この小説の中には、新子が前川と一緒に帝劇で見る「可憐な、アメリカのお妾物語」(百十二)である映画「裏街」のほか、いくつかのメロドラマが取り込まれている。妹の美和子が美沢と大勝館で見る「ジエニイの一生」(六十四)は、恩義にほだされて身をまかせた中年の上院議員が急死した後、実業家の囲い者になるヒロインの物語である。また、姉の圭子が新劇研究会で上演し、新子も読んだことがあるとされるアンリ・ルネ・ルノルマンの「落伍者の群」は、貧乏な脚本家の「彼」を支えるために旅回りの女優となった「彼女」が、「貞操まで、お金に換へてしまふ」(四十七)という内容を含んでいる。いずれも新子の身の上に通じる部分を持っているが、それらの結末が「貞操問答」で否定された典型的なパターンであることに注目したい。すなわち、「裏街」と「ジエニイの一生」は、ヒロインが愛する妻子ある男の死で終わり、「落伍者の群」では、「彼女」を「彼」が殺して自分も死ぬところで幕となるのである。それらの悲哀感のある結末は、受け手の同情を喚起すると同時に、その明解な完結性が、現実の重みを失わせ、実際にはありそうにない物語であるという印象を強く与えることにもなるだろう。「貞操問答」においては、そうした安易な結末を拒み、あえて新子と前川の前途については空白にし、読者の想像に委ねることによって、自分たちの

生きる日常世界に身近な存在として彼らの実在感を確保しようとしたのではなかったか。

既成の貞操観念を逸脱した女性の生き方を追究しようとして書き始められた「貞操問答」は、当初の構想が屈折する展開とはなったが、結果的には「性格本位」にしたことによつて登場人物たちに活き活きとしたリアリティが付与され、物語の運びも不自然な都合主義をまぬかれた、綻びの少ないものになっている。菊池寛が「自分の大衆作品の中では、まづ／＼甲の下に位する出来であつたと思ふ」（文芸「話の屠籠」『文芸通信』昭10・3）と自己評価しているように、その数多くの新聞小説の中でも密度の濃い力作のひとつであることは疑いない。

#### 一般読者の感性

ジャーナリストとして活躍した杉山平助は、新聞小説の読者の多様性について論じた「新聞小説雑感——うけるうけないについて」——（『新潮』昭10・11）において、次のように説いている。

高級なインテリに面白がられるやうな小説では、新聞小説としての大衆性が稀だといふことは、随分と古い頃から考へられてゐたひとつの定石であつた。この定石を破るかのやうに、高級な読者にも面白く、同時に大衆にも受けるといふやうな作品を、提供し得たのは、先には夏目漱石があり、近頃は菊池寛がある。

ここで漱石に比肩する作家として菊池寛をあげたとき、杉山が念頭に置いていたのは、おそらく「貞操問答」の成功であつたに違いない。後述のように杉山には、この少し前に「貞操問答」についての詳しい批評があるからである。引用部に続いて彼は、「もし漱石の小説を現代に連載させたとして、果して大衆性の点に於て思はしい効果をあげ得

るかどうかは疑問である」ともいう。なぜなら、「漱石の作品が朝日に連載された頃は、未だ連載小説の商品性といふものが十分に編輯者を刺戟してゐなかつた」が、「しかし世界大戦後から、日本の資本主義的發達がやうやく高められるとともに、新聞小説に於ける小説の商品性はやうやく意識的に編輯者の頭腦を刺戟するに至つて、(中略)次第に通俗性の濃厚なものを選擇する傾向があらはれて来た」からであり、「この情勢の中にあつても、なほ「高級」性と大衆性の結合」を果たすことができたという意味で、菊池寛は「完全に時代の英雄となり得た」と評している。

「貞操問答」が幅広い読者に支持されたことは、鈴木氏亨の『菊池寛伝』(昭12・3、実業之日本社)に、「インテリ階級は勿論、全社会人が讃辞を惜しまなかつた小説で、小林一三氏などは絶讃してゐる」とあり、新聞連載の終了直後に出版された単行本『貞操問答』は「二万部近い売行を示した」とされる。単行本は発売からわずか二週間で三十版を重ねている(『東京日日新聞』昭10・2・27広告)が、その好調な売れ行きは、新聞連載の完結を待たずに入江たか子主演による映画の公開がはじまり、大々的に宣伝されたメディア・ミックスの効果によるところが大きいと考えられるだろう。

新聞連載中に毎日読み、単行本も通読したという杉山平助は、この小説を「最近の長篇小説(一)『貞操問答』の魅力——登場する男女の愛と反撥」(『東京朝日新聞』昭10・5・26)で詳細に分析し、「デパートに陳列せられた第一級の熟練工の、成功した織物」にたとえている。「手工業時代の名人の底光りのしたコクは到底見られず、といつて工場むきの安価品からは断然群を抜いて洗練されてゐる」からであり、言い換えれば、芸術的ではないが通俗的すぎることもない、「高級」性と大衆性の結合」が見事に成し遂げられていると指摘するのである。

杉山によれば、「貞操問答」の魅力の本質は、まず登場人物の造型にある。

登場する女性は、すべて珍しい美人であり、インテレクチュアルであり、近代的な性格を与へられてゐる。といつて、かの女たちは、決して雲の上に浮遊するが如く現実の経済生活から遊離せず、それぞれ日常生活の悩みを負はされてゐる。

かの女等の生活の不安は、読者の同情をひくに十分すぎる程かの女たちは美しい。民衆は醜いものには、あまり同情を寄せないことを作者はよく知つてゐる。従つてどんな美しいものをも醜くしてしまふドン底の貧窮といふやうな苛烈な運命は、決してかの女たちを襲はない。必ず物質力の豊かな中年の男が、どこからか現はれて、かの女たちの運命の墜落をフウハリ食ひとめ、その温床的な雰囲気は、教養の高い善良な主人によつて支配される資産家のサロンのやうな香氣と温かみを発散せしめる。

美しく知的で近代的ではあるが、「現実の経済生活から遊離せず、それぞれ日常生活の悩みを負はされてゐる」という三人姉妹は、大毎・東日の女性読者層のもつとも主要な部分に見合う設定であり、読者の同情をひくにふさわしい。さらに、三人姉妹は「貧窮といふやうな苛烈な運命」に襲われるわけではなく、かといつて甘くなりすぎもしないように、構成および表現に工夫がほどこされている。「男女間の愛と反撥と、嫉妬と競争が、適度の精巧さと均衡をもつて綾どられ、結果までグングンひきずる闘争の展開は相当に力強い、しかも、その表現のリアリテイの度合ひが、一般の読者にとつて、深すぎもせず、浅すぎもしないところに、さらにこの作者の有利な魅力が加はるのだ」と杉山は論じて、小説を組み立てるあらゆる要素にわたつて一般読者への配慮がなされていることを評価している。では、実際の「貞操問答」の一般読者たちは、この小説をいったいどのように受けとめたのだろうか。

「貞操問答」の連載が終盤に差しかかった昭和九年十二月二十四日、文芸春秋社大講演会のために近畿中国地方を

歴訪の途次、菊池寛は大阪毎日新聞社に立ち寄り、「貞操問答」を愛読する十名の女性読者との座談会にのぞんでい  
る。出席者は、職業婦人や商店主、良家の婦人や令嬢などの知的エリート階層で、その内容は、「貞操問答座談会  
」と題して翌日から三回にわたり『大阪毎日新聞』（昭9・12・25～27）に大きく掲げられた。<sup>(4)</sup>また、このイベントに併  
せて、「全国各地から作者に対して毎日寄せられる投書は夥しい数に上つてゐる」として、その代表的な投書が「貞  
操問答」に沸く絶賛／読者はかく訴へる」と題して同紙（昭9・12・25）の学芸欄に紹介されている。

座談会では、最初に菊池寛が、「僕の創作態度は筋はきはどいところをさげ、平凡な出来ごとのうちに微妙な性格  
や心理描写をやりたいのです」として、新子と前川を早く関係させて「そこに起る貞操問題を縦横に書くつもりだつ  
た」が、「軽井沢で二人を接吻させたあと、読者から嚴重な抗議が舞ひ込むので、つい書き遅れてゐるのです」と語り、  
圭子、新子、美和子それぞれの性格を説明し、「前川夫人」はあるひは悪く書いてゐるかも知れませんが、品のある  
上流婦人を書いてゐるつもりです、昔の悪玉を書いてゐるのではない」とも述べている。

これに対して、女性読者たちからは、それぞれの登場人物について、賛否こもこも意見が出されている。以下、  
その一部を抜粋してみよう。

**奥屋さん** 私は月並な考へかも知れませんが「新子」さんが一番好きです、何だか愚図々々した引込思案ら  
しいところもありますが、そこが女性らしい良いところではないのでせうか、「美和子」は初め好きでしたが、だ  
ん／＼その態度が大胆になつて、しまひには姉さんの恋人、それから今では姉さんのパトロン「前川」をねらつ  
てゐるなんてビックリさせる娘です、時代が違ふので私なんかにはわかりませんがこのごろのあの年恰好の娘さ  
んはあ、なのでせうか

山川さん

お姉さんの愛人を奪ふなんて気持の悪い話です「新子」のような型の女性が一番多いでせうね

武岡さん

私は「新子」はじれつたくて嫌ひです、たゞの苦勞性といった古い時代の女ではなく相当判断力があるのになぜ「前川」に参るのでせう

大多数の一般読者の共感が、ヒロインの新子に注がれることは見易いだろう。先にふれた記事「貞操問答」に沸く絶賛／読者はかく訴へる」の筆頭にも、「不幸な新子／苦しめないで」として、「何とかもう少し慰めのある、心の安らぐ役割を与へてやつて下さいませ、すみれのように美しく弱い新子を菊池先生はどこまで苦しめようとなさるのでせうか、毎朝新聞をみるのがもう少し苦しくないように、どうかもうこれ以上に新子を苦しめないように切に／＼お願いいたします」（大阪・新子）という、新子に強い同情を示す読者の代表的な投書が掲げられている。

しかし、読者たちは必ずしも新子に対して無批判に同情しているわけではなく、座談会では「愚図々々した引込思案らしいところ」を否定的に見る読者も存在することが注目される。また、少数派ながら圭子に共感を示す読者もあり、「圭子」のような女性こそが愛されていゝのではないのですか、あの猪突味のあるお馬鹿なところに人間味があつて面白いですわ、「圭子」のからだには温い血が流れ、三人姉妹の中では一番現代的な香ひが強くないのですか、もう少し理智のひらめきを見せてくれたら一層ピツタリくるんですが……」（武岡）と述べているが、これに対して菊池寛は、「時代がこんなでなかつたら「圭子」を女優志願にはせず、過激な社会運動へでも走らし前川から金をとつてシンパ關係をつくらしたい意図があつたのですが、やりにくくてね……」と明かしている。

一方、美和子については、批判的な見方しか示されていないが、それはこの座談会が開催された時点で、連載中の



たい」と答えている。そこには、ヒロインの新子の生き方に託そうとした、生活第一、貞操第二という彼の持論に  
じみ出ているといえるだろう。

しかし、これに対する読者の反応はさまざまであり、「その意味で「新子」はセンチな女です、一とかど一家の犠牲となつてゐるような気持でゐますが、それは「新子」の一人よがり、あんな愚図々々した決断力のない女がそんなことを考へるのは滑稽です、むしろ「圭子」や「美和子」の方が、上手うまなのですから、その上手を引摺ひきずつて行かうなんていふのはをかしい、一家を支へるのはむしろ「美和子」のような勇敢で思ふことをズバ／＼やつてのける女性の方が適當ではないのですか」（武岡）といった批判もあるが、他方では、「貧しい生活を支へわづかな給料で働いてゐるインテリ職業婦人などは「金」の力をしみじみ感じてゐるはずで、「新子」は普通の職業婦人ではないでせうが、父を失つた家庭の娘として、その点はやつぱり力強く感じてゐるたんです、そこへ「前川」といふ援助者が現れ、しかもそれが、何等「新子」に不愉快さを与へない紳士であれば、その手から伸びる金の助けには知らず識らず乗るのではないでせうか、あそここのところを読んだとき、触れられたくはない心の隅を衝かれたやうで、ギクツとしました」（山浦）というように共感も示され、意見が分かれている。

なお、やや特殊な事例となるが、読者からの投書（前掲「貞操問答」に沸く絶賛／読者はかく訴へる）の中には、「日蔭の貞操／本当の歩みを」という見出しで、「ある方のお世話で小さい店を出してゐる新子とよく似た境遇の女」からとして、「貞操問答」の「文章の一行々々がまるで私の胸の中をはつきり刻みつけたやうな思ひがされます（中略）いろ／＼婦人雑誌の小説もたくさん読んでゐますが私たちのやうな日蔭の境遇にある女はいつも頭から不貞者ときめてしまひさも悪者のやうに書かれるのがこれまでの小説でございました、しかし家庭の幸福な妻だけに貞操があるのではない、日蔭ものにも貞操があるといふことを書いて下さつたのは菊池先生のこの小説がはじめてだと思ひます、同

情深い菊池先生、どうか貞操問答の結末で私たち「パトロンの持つ女」の本当の正しい歩み方をお教へ下さい」(京都・みどり)とあるように、「貞操問答」を読むことに人生のガイダンスを求めようとするものも見られる。

いずれにしても、女性読者たちは「貞操問答」をたんなる暇つぶしの娯楽として読んでいたのではなく、登場人物たちを自分の身近な存在として捉え、小説の中の出来事や三人姉妹の運命に深い関心を寄せていることが分かる。

このように読者が小説の登場人物を自分たちの現実生活と隣り合わせているかのように捉える享受のあり方は、一日毎に一回分を時間をおきながら断続的に長期間にわたって読み継いでいくという、新聞小説における独特な連載形式の問題と深く関わっていることに注意したい。

先駆的な読者論で知られる大熊信行は、「新聞文学の存在形式」(『思想』昭10・1)において、新聞小説の連載形式という特殊な制約を、逆にその存在形式の積極的な独自性として捉え返している。そこで重要となるのは、新聞小説が一日毎に一回分ずつ間隔をおいて連載され、読者が次の回を待ちうけるために時間経過が必要なことであり、それが生活における現実の時間経過であることによって一定の心理的な錯覚を起こしやすいとして、次のように考察するのである。

〔…〕読者は作品内容の発展を日常生活の意識の一隅にひっかけながら日をおくらなくてはならない。そのような事情のもとでは、まづ作中人物にたいする読者の親しみが、一層深まりやすいことは想像にかたくないが、それよりも作品内容そのものが、全体として読者自身の生活と並行して発展しつゝあるかのやうな錯覚が生じてくることは、きはめて自然なのである。新聞小説の読者は、紙面に眼をさらしてゐない色々な瞬間にも、作中の事件と人物とを想ひうかべ、ある事件が、ある人物が、ある生活が、あたかもおれの日常生活と並行しつゝあ

るかのやうな実在感を密接にもよほし、小説にたいする関心は、生活の現実的関心と混淆しないまでも、しばしば交錯し、したがって読者が小説からうける効果の総量は、はなはだ大きなものとならざるをえない。

こうした新聞小説における事件や人物が読者にもたらす実在感、一日毎の連載という独自の形式にもとづくものであり、「事件の発展も、主人公たちの運命も、生ける現実の歩みのごとく、未知を孕む」という点で、新聞小説は現実の人生と同じ構造を持つとされる。

しかも、新聞小説が連載されている間、あらゆる読者は等しく毎日一回分ずつを読み継ぎ、誰も人より先に次を読むことはできないという享受の社会的な条件は、新聞小説がもたらす実在感を読者たちが共有し、その強度をより一層高めることにつながる。「貞操問答」の新聞連載中に開かれた座談会や投書による熱心な愛読者の声には、そのことがよく示されている。

周知のとおり、小林秀雄は「菊池寛」〔中央公論 昭12・1〕で、「氏は最初から自分の為めにも文学の為に書かなかつた、(中略)たゞ一般読者の為に書いて来た作家なのだ」と論じ、モーパッサンの『女の一生』を引きあいに出して、「一般読者は(中略)自分達の実生活に近い人間の興味を発見してゐる」のであり、「彼等は実生活に対して鋭敏な様に小説に対して鋭敏なのだ」と評した。この見解は、菊池寛の「当代の読者階級が作品に求めているものは、実に生動的価値である。道徳的価値である」〔文芸作品の内容的価値「新潮」大11・7〕という主張を敷衍したものに他ならないが、そうした小説の内容と実生活を接続させて捉えていく一般読者の感受性は、一日毎の連載という新聞小説の存在形式の独自性に多くを負っているのである。

通俗的挿絵の表現

新聞小説としての「貞操問答」が多数の読者に支持されたのは、小林秀恒の描いた挿絵の力もあずかっているだろう。

小林秀恒は、池上秀畝に師事して日本画を学んだ後、昭和八年十一月に独立して挿絵に専念するようになる。それまでも、『文芸春秋オール読物号』『週刊朝日』『キング』などの雑誌にいくつかの挿絵を描いていたが、新聞小説の挿絵をはじめて手がけたのは、長田秀雄「昭和血士録」〔『国民新聞』昭8・11・24～9・4・23〕であり、菊池寛の「貞操問答」は新聞小説挿絵としては二作目になる。

まだ新進の挿絵画家にすぎない小林秀恒が、新聞メディアの筆頭に立つ大毎・東日の連載小説の挿絵を描くことになつたのは、菊池寛の計らいによるものだった。当時、菊池寛の原稿料が高かつたため、新聞社に配慮して、「新人なら画料が安いからって「貞操問答」の挿絵に小林が選ばれた」とされる。その画料は、一カ月で三百六十円というから、一回につき十二円になる。

「貞操問答」の挿絵について、菊池寛は「挿画の新人小林秀恒君」〔『キング』昭10・9〕で、「僕が、大毎、東日に『貞操問答』を執筆した時、小林君がその挿画家であつた。始め十回位は、思はしくないので少し心配させられたが、二十回頃からメキ／＼腕が冴えてきて圧倒的な評判となつた。君の挿画は日本画家として本格的な素養があるので忽ち機峰を發揮したわけ。君の挿絵の構成が慥かでそれに、手法潑瀾として若いだけに絵がのび／＼としてゐる。小林君の挿絵は、いくら沢山描いても、側で見るやうな心配がなく、そして、決して行詰まりのないやうに思はれる。挿絵は何処までも真実であると同時に甘美的であることが必要だが、君の挿絵を見ると、その両方を持つてゐるところに

頼もしい生命がある」と述べている。「貞操問答」の連載がはじまった当初の挿絵がぎこちなかったことは、小林秀恒の回想「貞操問答」の挿絵と僕」（『菊池寛全集』月報8、昭13・1、中央公論社）でも、「当時挿絵を描き出したのホヤで、日日新聞といふ派手な舞台を与へられたのだからそれこそボーとして了つておつかなビックリながら描き出したのはいゝが、始めの五六枚といふものは感激で只もうワク／＼するばかり、何を描いてゐるんだか自分でもわからない。手が振へて線が真直ぐ引けないのは弱つた。文壇の大御所と駆出しの挿画家である」としているが、次第に連載が進むにしたがつて本来の持ち味を發揮しにくくなった挿絵を描くようになり、「圧倒的な評判」を獲得していくのである。やがて連載の完結直後に刊行される単行本『貞操問答』も、小林秀恒が装幀と口絵を担当し、また菊池寛が『婦人倶楽部』に連載する「結婚の条件」（昭10・1～11・5）でも挿絵を任されることになる。

先に掲げた菊池寛による小林秀恒の挿絵評は、菊池寛が「貞操問答」の新聞連載中にその挿絵をよく見ていたことをうかがわせる。日本画家としての修業を積んだ小林秀恒の挿絵は、流麗なタッチで美男美女を甘美に描き、また写実的な情景描写を得意としていた。しかも、「挿絵の構成が慥かでそれに、手法潑溲として若いだけに絵がのび／＼としてゐる」とされる、その構成や表現手法における清新な試みが、後に見るようになって示されている。

小林秀恒が挿絵画家として出発するにあつて、しばしばその作風がよく似ているといわれる岩田専太郎の挿絵の表現技法に倣つたことは間違いないだろう。通俗的な挿絵に専念し、大正末頃から第一線で活躍してきた岩田専太郎は、たえず斬新な表現を追究し続けていた。その挿絵は、基本的には小説の本文にそくして場面を視覚化したものだが、決してたんなる本文の説明にとどまるものではなかった。

『挿絵の描き方』（昭13・9、新潮社）は、のちに岩田専太郎が挿絵画家志望者のために編集した入門書であり、小林秀恒も「挿絵の用具・材料」についての解説を寄稿しているが、同書の巻頭で岩田は、通俗的挿絵とは何かについて

説いている。それによれば、通俗的な挿絵というのは、「新聞雜誌等の現代小説、大衆小説、或は青少年少女読み物の中に挿入されるもの」であり、教科書や図録等の中に挿入される絵や純粹に画壇に属する画家の描くものとは、その特質が異なっている。教科書や図録等の挿絵は、「その目的から絶対に正確を必要とし、(中略) 絵画的な面白さなどといふものは第二義になる」し、「純粹画家の立場から多少余技的に描かれるものは、絵画的な良さを第一義とし、説明を寧ろ第二義として」、「作品の内容の単なる説明でなく、時としては全然説明を離れて、画家の自由に描いたと思はれるもの」もあるとされる。これに対して、「出来るだけ大勢の人に理解し得る程度のものを描かうと心掛けるのを、かりに通俗的な挿絵と呼びたい」とし、それは「作品の内容を出来るだけ忠実に説明すると共に、単なる説明だけに終らず、そこに興味といふものを考慮に入れ、挿絵的な面白さといふものを兼ね備へて、説明であると共に絵としての面白さも十分に表現しようとするもの」だといふのである。つまり、通俗的な挿絵の独自性は、あくまで忠実に説明することを前提としつつ、いかにして小説の内容を活かし、大衆的な一般読者の興味を引きつけるような「挿絵的な面白さ」を実現できるかにかかっていることになる。そのためにはどうすべきなのだろうか。

通俗的な挿絵は、「出来るだけ多くの人に見せるといふのが目的の一つですから、その目的に副ふ為めには、絵を見る教養の積まれた人ばかりでなく、全然絵画の鑑賞に無関心な人にも悦ばれるものが描きたいのであります。その為めに、絵画的表現の技巧としても、出来るだけ平易に分り易いといふこと、誰が見ても不自然に感じないやうに描くことが肝腎であります」、あるいは「物を美しく見、美しく表現するといふことが大切なのであります」と岩田専太郎は説いている。このような考え方を小林秀恒も共有していたことは、ほぼ同様に「絵の解らない人にも解るやうな仕事をするといふことを忘れては駄目だ<sup>6</sup>」というのが彼の持論だったと伝えられることから明らかだろう。

おりしも小林秀恒が挿絵画家として歩みはじめた頃、挿絵における製版や印刷の効果に関心の高い岩田専太郎は、

新しい技術として普及しつつあったハイライト版を駆使することによって新機軸を打ち出そうとしていた。

それまで一般的だった写真版が、画面全体に網点が入って薄暗い色調になるのに対して、ハイライト版は、原画の白地部分に相当するところには網点をまったくつけず、濃淡の部分だけに網点をかける方法で、白と黒のコントラストが明快であるとともに濃淡をつけた立体的な表現が可能となる。岩田専太郎が部分的にハイライト版を用いたことはそれ以前にもあるが、全面的にハイライト版を採用するのは、北村小松の「情炎の都市」〔大阪毎日新聞〕「東京日日新聞」昭8・7・25〜12・31の挿絵からであり、引き続き挿絵を描いた小島政二郎の「花咲く樹」〔東京大阪両「朝日新聞」、昭9・3・23〜8・20〕でもこれを駆使していた。それに倣って小林秀恒も、「貞操問答」の挿絵ではじめてハイライト版を試みていくのであり、最初のうちはハイライト版の特色である白地部分が十分に活かされていないが、菊池寛が

「二十回頃からメキ／＼腕が冴えてき」たと評したとおり、新子が前川家の軽井沢の別荘に出立するあたりから、挿絵が生彩を帯びるようになる。

このハイライト版の特色が活かされた一例として、第四十七回の挿絵(図1)を見てみよう。軽井沢に新子が滞在中、演劇に熱中する姉の圭子が、劇場からタクシーで帰る場面である。ここでは、画面の左寄りにバストシヨットで、公演中の芝居の資金繰りに思いをめぐらすタクシーの中の圭子を描き、右上の後部窓の向こうに夜の景色を配している。タクシーの明るい車内と車外の暗い風景は、白と黒のバランスの取れたコントラストを形作っているだけでなく、圭子のひたむきな表情や車窓から見える電車や自動車が行き交う夜の銀座通りが淡い陰影をつけて精細に描かれ、奥行きのある立体的な構図となっているといえる。このほか



図1

にも「貞操問答」には、得意とする美人画ふうの表現によってフラッパーで表情豊かなモダン・ガールである美和子を描いた挿絵のように、登場人物の性格や感情を明快に視覚化したものや、上野駅や浅草の映画街などの登場人物が置かれた場所の特徴を分かりやすく捉えた挿絵などにもすぐれたものが少なくない。それらの写実性の高い挿絵には、微妙な陰翳のある表現を可能にしたハイライト版が効果的に用いられているのである。

こうした新しい製版印刷の技術の採用は、挿絵における構図や表現技法の革新をもたらすことにつながる。ハイライト版を先行して採用した岩田専太郎は、「情炎の都市」や「花咲く樹」において、映画のカメラ・アングルを彷彿させる独特な角度から人物や場面を描き出し、その変化に富む挿絵によって説明にとどまらない「挿絵的な面白さ」を実現している。この岩田専太郎が切り拓いた挿絵における映画的技法は、「貞操問答」の挿絵に巧みに取り入れられるとともに、小林秀恒はさらにそれを独自に拡張していった。そこには、映画のカメラのような融通無碍なアングルの変化、会話場面における切り返しショット、クローズアップ、二重焼付けや多重露光、スプリット・スクリーン（画面分割）、画面内にもう一つのフレームを導入する視覚的表現、独特のタブロー的な構図など、多様な技法がふんだんに盛り込まれている。それらの挿絵は、小説の本文との関わりにおいてどのような機能を果たすことになるのだろうか。

まず最初に注目したいのは、「貞操問答」の挿絵にクローズアップが多用されていることである。新子が前川の子どもたちの家庭教師として軽井沢に滞在中の第四十九回には、何者かに背後から両手で目隠しされた新子の顔が、画面いっぱい描かれている。ここで新子の目を覆っているのが、前川の子どもの小太郎であることは小説を読めばすぐに明らかになる。その新子の目を覆う小太郎の両手は、子どもにしてはやや大きすぎてバランスが取れていないが、小説よりも先に挿絵を見る読者は、それが誰なのかという興味をかき立てられるはずである。さらに、その少し



図 3

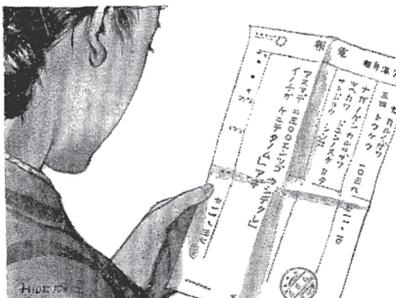


図 2

後の第五十三回の挿絵(図2)では、新子の肩越しに電報が大きく描かれている。姉の圭子が演劇の資金繰りに窮して至急送金を頼む電報であり、挿絵には小説の本文どおりの電文が記されているのが読める。一般にクローズアップは強調の効果をもっているが、ここで新子に寄り添う位置から電報をのぞき込むように読む読者は、新たな苦勞の種を背負い込んだ新子への共感を喚起されることになるだろう。

クローズアップを用いた挿絵には、二重焼付けの技法がほどこされているものも少なくない。第七十回の挿絵(図3)は、前川夫人の綾子をクローズアップし、その背景に小太郎が書いた綴り方の用紙をあしらっている。その文中には「したく」と書いたのを消して「仕度」と直した箇所が見える。新子が「仕度」の表記は正しくは「支度」であることを指摘して、綾子夫人の怒りを買う場面であり、新子をにらみつける綾子夫人の顔は、淡い暗色で描かれている。その後ろに大きく浮かび上がる綴り方の用紙は、やや仰角気味のアンクルから捉えられた綾子夫人の顔のクローズアップの威圧感を増幅させているといえる。

一方、第七十九回は、軽井沢で突然の雷雨にあった新子と前川が、無人の別荘に避難した場面であり、その挿絵(図4)は、左寄りの前景に新子をクローズアップで捉え、後景には窓辺にたたずむ前川の姿を配している。乱れた髪の新子は、爪を噛んで不安そうな表情を浮かべているが、この場面は、小説では前川がいる

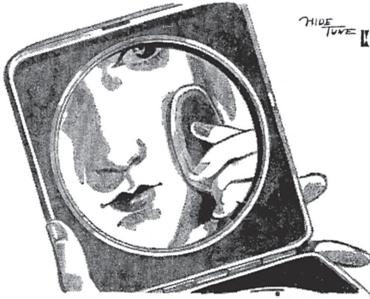


図 5



図 4

サロンのらしい部屋に一足遅れて入ろうとした新子が、不気味に薄暗い室内の様子に「ある恐怖と圧迫を感じて」扉口で入り煩っているところにあたる。つまり、挿絵には、不安なまなざしの新子とそのまなざしに映っている室内の情景が、二重焼付けの技法で描かれているのである。クローズアップされた陰翳のある新子の表情には緊迫感があり、そこに窓辺に立つ前川の後ろ姿が組み込まれることによつて、二人の間に何らかの出来事が起きることを予感させるサスペンスの効果が高められている。

この雷雨の中で、前川は「最後の雷鳴のはげしさに、思はずすがりついた新子を掻き抱くと、どちらからともなく、唇を合はせてしまった」(八十二)のだったが、小説では二人が接吻する場面は直接は描かれず、雷雨が止んで帰宅した二人がそれぞれ心の中で振り返るかたちで示される。新子は「何といふ不思議な心理だらう。(中略)——準之助氏は、さのみに愛してもあらず、一言だつて愛を語つたわけでもないのに、どうして、あんなに脆くも唇を許してしまつたのだらうか」(同前)と困惑するが、その場面の挿絵も、濡れた着物を着替える新子の傍らに前川の面影が二重焼付け的にあしらわれている。そして続く第八十二回には、化粧を直す新子の顔が鏡に映るコンパクトを描いた超クローズアップの挿絵(図5)が登場する。この場面は、小説では前回を引き継いで新子の揺れ動く心理描写が中心となり、本文には「雨によごれた顔を、クリームでふき取り、鏡を出して、

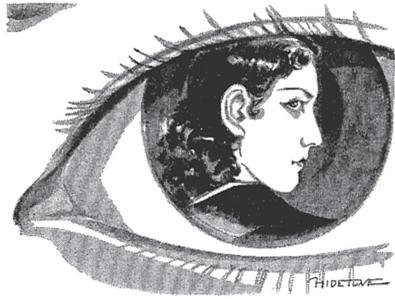


図 6

化粧を直さうと思つたが、鏡を見ることが、とても辛かつた」とある。そうした乱れる思いを新子が心の奥に封じ込めようとしていることが、鏡のフレームによつて視覚的に表象されているのであり、それを超クローズアップで浮き彫りにした斬新な構図となつている。<sup>8)</sup>

同様の超クローズアップの技法は、第百五回の挿絵(図6)にも見ることができ。そこでは、新子の左目が画面に収まりきれないほど極端に大きく描かれ、その瞳の中に姉の圭子の横顔が二重焼付け的に映し出されている。軽井沢から帰つた新子が、前川から娘の祥子を看病した謝礼にもらつた大金を圭子に横領されたことを知り、身勝手な圭子を責め立てる場面であり、こらえていた鬱憤を一度に爆発させた新子の怒りとそれに反発してふて腐れる圭子の激しい対立関係が、超クローズアップと二重焼付けの技法を用いて、インパクトのある挿絵として提示されているのである。この二人の衝突は、続く第百六回に引き継がれて展開するが、その挿絵では、わずかに距離を広げたクローズアップとして圭子と向きあう新子の顔が描かれている。

また、二重焼付けの技法は、このほかにも随所に見出すことができる。第五十五回の挿絵では、「落伍者の群」の劇評を掲げた新聞を読む新子の姿がフルショットで捉えられ、その余白に「彼女」役を演じる圭子の顔が淡いタッチで描かれているし、第百十三回の挿絵には、前川と帝劇で映画「裏街」を見て帰宅した新子のフルショットが、その後「裏街」のヒロインの顔を配して示されている。前者で新子は姉の演技が好評を博したことに感激し、後者は前川の世話になろうとしてゐる新子が「裏街」のヒロインの哀しい境遇に思いを馳せているように、二重焼付けの



図 7



図 8

技法の多くは、登場人物の内面を視覚化するのに用いられているのである。さらに、こうした二重焼付けに類似するものとして、いくつもの画像を一つの画面に重ね合わせて合成する多重露光が用いられていることにも注目したい。

第百十五回では、前川からバーを開くことを勧められた新子が、眠れない夜をバーの名前を考えながら過ごすことになるが、その場面を描いた挿絵(図7)は、新子の寝姿に酒を飲む男や灰皿、さまざまな名前の酒場の看板が重ね合わせられている。そしてその翌々日、新子がいよいよバーを開業することに決める第百十九回の挿絵(図8)には、三人姉妹の横顔が真ん中の新子を圭子と美和子が挟むかたちに重ねて描かれる。ここでは、圭子と美和子が目を見開いて前方を向いているのに対して、二人に挟まれた新子の視線はややうつむき加減で物思わし気な表情をたたえている。「(真中まぐそ、はさんですてる。)」と、云ふのが、南條家の新子の場合なのであり、「姉は年上なるがゆゑに威張り、妹は年下なるが故に甘やかされる」という、いつも損な役回りを引き受けざるをえなかった我が身を思い、自分一人で決断する箇所にあたるが、挿絵はその小説の本文から離れて、三人姉妹の関係性をイメージ化したものと捉えることができる。その多重露光的な技法による独立性の強い挿絵は、物語が一つの重要な転換点に差ししかかっていることを指し示す効果をもたらすことになるだろう。

映画的な表現の技法としては、独特なカメラ・アングルからのショットが用い



図10



図9

られていたことも特徴的である。第六十六回は、新子の軽井沢に滞在中に美和子が美沢を誘惑して接吻する場面となるが、それを描いた挿絵(図9)は、やや俯瞰的な位置から美和子と美沢を捉えることによつて、まさに映画さながらのロマンティックな甘い雰囲気演出している。こうした俯角あるいは仰角からのショットだけでなく、なかには天井から見下ろすような極端なアングルのショットも散見される(第百十四、百二十六、百七十九回)。

これらの多様なアングルのショットは、連載小説において同じ場面が続く場合などに、挿絵に変化をつけ、読者の興味をつないでいくためにしばしば用いられるが、これとほぼ同様の機能を果たすが、画面を複数に分割して対位的に関係づけるスプリット・スクリーンや会話場面における切り返しショットである。

たとえば、「夫人策動」と題された章がはじまる第百五十三回から八回にわたる一連のシークエンスは、演劇マニアの圭子が前川に後援を依頼しようとした電話を綾子夫人が受けたことが機縁となり、綾子夫人が圭子を自邸に呼び出して、前川と新子の関係を探りを入れる展開をたどる。その第百五十三回の挿絵は、画面を縦に二分割したスプリット・スクリーンふうに、右側に着飾って外出しようとしている綾子夫人、左側に電話室で応対する女中を描いている。それに続く第百五十四回では、電話を媒介として綾子夫人と圭子との噛み合わない会話が繰り返されるが、そのときの挿絵(図10)は、同じくスプリット・スクリーンで、



図12



図11

右上に綾子夫人、左下に圭子が電話をかける姿をそれぞれクローズアップで描いている。綾子夫人を右上に配したのは、その高慢さを示すものであり、圭子を真向かいにはなく左下にずらして配置したのは、両者の思惑の齟齬を視覚的に表現したものだろう。その画面に広く取られた余白がコントラストを高め、緊迫感のある挿絵となっている。

しかも、次の第百五十五回の挿絵は、三面鏡の前に腰かけて圭子の来訪を待ちながら策略を練る綾子夫人をフルショットで描き、第百五十六回から百六十回にかけて展開する応接室における綾子夫人と圭子の会話場面を描いた挿絵は、切り返しショットの連続によって構成される。すなわち、綾子夫人の肩越しからの圭子のフルショット(百五十五)、綾子夫人のクローズアップ(百五十七)、圭子のクローズアップ(百五十八)、圭子の肩越しからの綾子夫人のフルショット(百五十九)、やや俯角気味の圭子のフルショット(百六十)というように、綾子夫人と圭子を捉えたショットが交互に切り返されていくのである。なかでも第百五十七回の挿絵(図11)が、綾子夫人のクローズアップの背景に半獣神を二重焼付け的に描き、これと対照するかたちで、続く第百五十八回の挿絵(図12)が、圭子のクローズアップの背景にピエロのマリオネットを二重焼付けにしていることは、読者の興味を喚起するだろう。これらの半獣神やピエロのマリオネットは、小説の本文に言及があるわけではないが、前者が策略をめぐらす綾子夫人のイメージ、



図13

後者が相手にうまく踊らされていることを知らない世間知らずな圭子のイメージをそれぞれ視覚化したものであることはいうまでもない。両者が各々にひそかな思惑を抱きながら相手と接していることは、そのクローズアップされた顔に暗色がほどこされていることにもうかがえるが、半獣神やピエロのマリオネットというメタフォリカルな図像を付け加えることによって、読者により分かりやすく登場人物のキャラクターを伝えようとしているのである。<sup>9)</sup>

また、「貞操問答」の結末部の挿絵には、もう一つの映画的な技法が用いられていることにも注意したい。前述のとおり、この小説では、前川があらゆるものを犠牲にしても新子を守る覚悟を決めて、二人がともに歩み出すところまででオープン・エンディングとなるが、それを受けた挿絵として、第百九十四回は、夜の銀座を背景に出雲橋を渡る二人を仰角気味のミドル・ショットで示し、次の第百九十五回には、二人の歩く姿を正面からバストショットで捉え、その背後に綾子夫人と美和子を二重焼付的に描いている。そして最終回の挿絵(図13)は、前川と新子の横顔をクローズアップし、その後方に都市の夜景をごく小さく配しているのであり、そこでの前川と新子の横顔のクローズアップは、画面の右上から左下への対角線の軸にそって後景のビル街を極端に小さく描いた誇張された遠近法の構図に見事に収斂している。このときの二人は、小説においては歩き続けることになっているが、挿絵には動きは感じられない。極端な遠近法による端正な構図であることによって、むしろ二人は静止し続けているようにしか見えないのである。

こうした表現のあり方は、ピーター・ブルックスが「あらゆるメロドラマの特に場面や幕の終わり方で、静止場面<sup>タブロー</sup>によって意味が解明される傾向がある」とする

十九世紀のメロドラマ劇の結末と通底しているのではないだろうか。「その場面では、登場人物の態度や身振りが組み立てられたのち一瞬動きを止め、絵解きもののように、感情が視覚的に要約されることになる」のであり、「静止場面は、観客に表象化された意味、明確な視覚記号で表現された感情や道徳的状态を理解させることになる」という。このようなメロドラマの終わり方は、二十世紀の映画にも盛んに取り入れられてきた。<sup>11)</sup>「貞操問答」の最終回の挿絵は、そうした映画的な技法の一つであるタブロー的なショットとなっている。それは、小説がオープン・エンディングによって完結性の希薄な終わりを迎えているのを補完するかたちで、「殉愛への道」へと歩んでいく新子と前川の感情的な結びつきを視覚的に要約し、読者に結末の鮮やかな印象を提示する機能を果たしていると考えられる。

のちに小林秀恒は、先に言及した「貞操問答」の挿絵と僕」の中で、「文字通り一生懸命だ。全身でぶつかつていった。今考へてもあれ程作品と四つに組んで、(中略)泥まみれで描いた絵は無いといつてもいゝ位だ」と回想し、その反響の大きさについてこう述べている。

とにかく一生懸命だった。

その「貞操問答」は菊池先生の作の中でも傑作の一つに入るものだったので、幸運にもその好評の何百分の一を担う光栄に浴したわけだ。

掲載中の評判の素晴らしさは、その後幾つか新聞も描いたが、あれ程のものはない。

雑誌や新聞に「何々問答」といふ見出しが盛んに使はれたのも当時だ。その評判振りはものすごい位だった。

自らの挿絵については控え目な評価をしているが、「貞操問答」において一般読者たちの圧倒的な人気を獲得した

のは、菊池寛だけではなかった。小林秀恒もまた、この挿絵の成功によりたちまち人気挿絵画家になっていくのである。その渾身の力を込めて描いた「貞操問答」の挿絵には、小林秀恒のすべてが集約されているといっても過言ではない。

## 注

- (1) 江藤淳「解説」(『菊池寛文学全集』第十巻、一九六〇・七、文芸春秋新社)は、「貞操問答」を前作「三家庭」と比較して、「三家庭」にはほとんどあらわれていなかった時代の圧力が、「貞操問答」にはかなり明瞭に跡を印している」と指摘している。
- (2) 「貞操問答」小考」(『菊池寛随想』所収、二〇一七・八、未知谷)。
- (3) 菊池寛は「文学の味ひ方」(『婦人倶楽部』昭16・12)において、「貞操問答」の予定された筋と類似する設定について解説している。その筋書きでは、勤め先の会社の重役の妾になった姉のおかげで、妹二人が立派な結婚をするが、「お姉さまが、こんな生活をしてみると、私達まで、肩身がせまいわ」と非難されることになる。
- (4) 座談会の出席者は、菊池寛、戸野原路子(菓子店経営)、奥原庸子(BK文芸課長夫人)、大内榎子(そう女店員)、河井治子(河井八重子氏令嬢)、吉田寿子(吉田洋裁研究所主)、武岡美恵(喫茶店経営)、永井栄子(婦人記者)、内野照子(ピアニスト)、山川初子(女医)、山浦きよ(高島屋人事課員)、大阪毎日新聞社から平川清風編輯総務、大竹憲太郎学芸部長、上田正二郎社会部長、渡辺均学芸副部長、本田親男社会副部長ほか社員数名。
- (5) 小林文枝「忙しかった七年八月の思い出」(『小林秀恒展』所収、二〇〇九・一、弥生美術館)。
- (6) 「小林秀恒画伯を想ふ」(『大衆文芸』昭17・11)に掲げられた吉田貫三郎の追悼文による。
- (7) なお、第八十四回には、前川が雷雨の別荘における新子との接吻を思い出す場面があり、それを描いた挿絵でも、前川をクローズアップで前景に捉え、新子を抱き寄せる前川のシルエットが後景に二重焼付的に描かれ、第八十一回の挿絵と対比的な構図が形作られている。
- (8) 鏡をモチーフとした挿絵は、フルショットで捉えた新子の傍らの鏡台に美和子を映した第百四十九回や、洗面所の大きな鏡に歯を磨く前川と入口に立つ綾子夫人をバストショットで描いた第百六十七回にもあり、いずれも鏡がそのフレーム内の対象を際立たせている。

ている。

(9) 同様に登場人物のクローズアップにメタフォリカルな図像を二重焼付的に描いた挿絵は、第百八十四回の挿絵にも見ることが出来る。ここでは、バー・スワンに乗り込んだ綾子夫人に面詰されて涙を浮かべる新子がクローズアップされ、その背景に純潔のメタファーとして水仙の花が二重焼付的に描かれている。

(10) 『メロドラマ的想像力』（四方田犬彦・木村慧子訳、二〇〇二・一、産業図書）。

(11) たとえば、映画「裏街」のエンディングにおいても、愛するウォルター・サクセルが死んだ後、悲しみのあまり喪心したヒロインのレイの横顔がクローズアップされ、タブローとして提示されている。